

佐賀県研究成果情報（作成 2023年1月）

[情報名] イチゴ品種佐賀 i9 号の育苗期においては多肥でも少肥でも炭疽病の発病リスクが高まる

[要約] イチゴ品種佐賀 i9 号の育苗期における炭疽病の発病リスクは、肥料が少ない場合や多い場合に高まる。さらに短期間の集中的な液肥の施用によっても、発病リスクが高まる。

[キーワード] イチゴ炭疽病、施肥、窒素施用量

[担当] 佐賀県農業試験研究センター・環境農業部・病害虫・有機農業研究担当

[連絡先] 0952-45-8808・nougyoushikensenta@pref.saga.lg.jp

[分類] 技術者参考

[部会名] 野菜

[専門] 作物病害

[背景・ねらい]

イチゴ炭疽病は、既報告で多肥により発病程度が高まるとされているが（石川ら、1989）、佐賀 i9 号は収量確保のために多肥とする場合もあり、そのことが炭疽病の発病増加につながる懸念がある。このため、施肥量の違いが本品種における炭疽病の発病に与える影響を検討する。

[成果の内容]

1. イチゴ炭疽病は、少肥もしくは多肥で管理した場合、中肥で管理した場合より発病リスクが高まる（図1、表1）。
2. 短期間に集中的な液肥を散布した場合においても、イチゴ炭疽病の発病リスクが高まる（図1、表2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本情報は佐賀 i9 号の育苗期に適用できる。
2. 本試験は、育苗期間に施肥量を変えて管理した後、イチゴ炭疽病菌を接種した場合の発病を調査したものである。
3. 液肥を施用する際には、炭疽病の薬剤防除も必ず励行すること。また、無病親株の使用、雨よけ育苗、ポットの間隔を広げる、葉かき等の耕種的対策を組み合わせることで総合的な防除を実施すること。

[具体的なデータ]

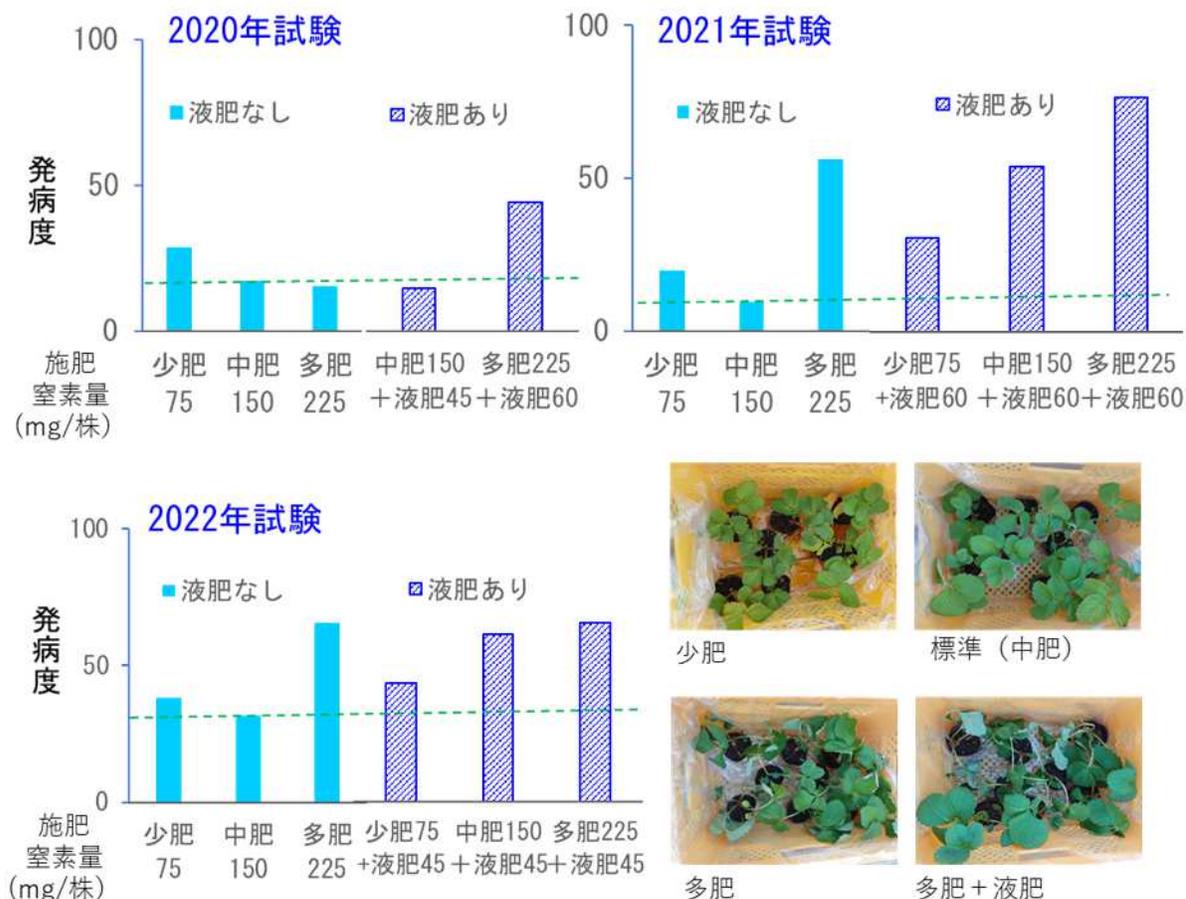


図1. イチゴ炭疽病の発病に対する施肥の影響

2020年、2021年：少肥区はIB化成S1号を7月中旬に1回、中肥区は7月中旬および8月上旬に2回、多肥区は7月中旬、8月上旬および8月下旬の3回ポット土壤に置いた。液肥追加区は9月1日から9月15日に3~4回、OKF-1 1,500倍液を各ポットに150ml灌注した。採苗：6月下旬、切り離し：7月下旬

2022年：少肥区はIB化成S1号を7月下旬に1回、中肥区は7月下旬および8月中旬に2回、多肥区は7月下旬、8月中旬および9月上旬の3回、ポット土壤に置いた。液肥追加区は9月13日から9月27日に3回、OKF-1 1,500倍液を各ポットに150ml灌注した。採苗：7月上旬、切り離し：8月中旬

2020年9月17日、2021年9月22日、2022年9月29日に炭疽病の分生子懸濁液を供試株に直接噴霧接種し、発病調査は2020年9月30日、2021年10月1日、2022年10月18日に実施した。グラフ中の点線は中肥での発病度を示す。

表1 置肥の量の違いが炭疽病発病に及ぼす影響※1)

肥料の量	中肥とのリスク比	95%信頼区間
多肥	3.24	2.13-4.93
少肥	1.81	1.10-3.00

表2 追肥の有無が炭疽病発病に及ぼす影響※1)

	追肥なしとのリスク比	95%信頼区間
液肥の追加	1.63	1.38-1.92

※1) 2020年から2022年の3年間の試験結果をメタアナリシスで解析(統計ソフトEZRを使用)。中肥とのリスク比3.24ということは、中肥より3.24倍発病のリスクが高いことを示している。

※1) 2020年から2022年の3年間の試験結果をメタアナリシスで解析(統計ソフトEZRを使用)。

[その他]

研究課題名：いちご新品種の高収量・高品質生産技術の確立

予算区分：国庫

研究期間：2020~2022年度

研究担当者：古田明子・井手洋一

発表論文：古田明子ら(2023)九病虫研報(講要、印刷中)